

博士論文（要約）

論文題目 古代和歌修辞の研究

氏名 萩野 了子

【目次】

凡例 iii

総論 1

第一篇 序詞の変容

第一章 古今和歌集の序詞 25

はじめに 序詞の構成要素 序詞の「靈性」

万葉序歌における心物両叙述の関係 古今集序歌の心物の結合力
掛詞による連結 古今序歌と六歌仙二重文脈歌 結論

第二章 心物対応構造の変質と序詞 41

心物対応構造の変質 初期万葉序歌の作為的構成 人麻呂序歌の功績
寄物陳思歌群編者の要求 古今集的和歌と古今集的序歌の隔たり
鄙の地で詠う序歌 物象の力の崩壊 結論——古今和歌集への道筋

第二篇 序詞の表現に見る修辭意識

第一章 同音反復式序詞の考察 前編——古今集当代歌の同音反復式序詞について 60

同音反復式序詞とは何か 序詞の変遷 表象性を抱える物象

古今集読み人しらず歌の表現 古今集当代歌の表現
後撰集から古今集序詞を捉え返す 結論

第二章 同音反復式序詞の考察 後編——地名反復の序詞について 92

はじめに 地名反復の序詞と地名に連鎖する序詞——万葉集——

地名反復の序詞——古今集—— 地名に連鎖する序詞——古今集—— 結論

第三篇 修辞技法としての掛詞の誕生と展開

| | |
|---------------------|-----|
| 第一章 万葉集の掛詞について…………… | 121 |
|---------------------|-----|

| | |
|--------------------------|--|
| 音の連鎖という様式 『万葉集』における含蓄型掛詞 | |
| 譬喻歌と縁語・掛詞 結論 | |

| | |
|------------------|-----|
| 第二章 掛詞の表現構造…………… | 128 |
|------------------|-----|

| | |
|--------------------------------|--|
| はじめに 序詞から掛詞への展開 掛詞式序詞の成立 | |
| 譬喻歌の二系対比構造 漢字表記と寓喩表現 平安期の掛詞表現へ | |
| 結論 | |

| | |
|------------------|-----|
| 第三章 物名歌と誹諧歌…………… | 143 |
|------------------|-----|

| | |
|----------------------------|--|
| 物名と掛詞について 物名の源流と誹諧歌 誹諧歌の特徴 | |
| 物名歌の特徴 古今集巻十に入らない物名技法歌 | |
| 物名歌が詠われる場について 物名歌と中国詩 | |
| 古今集における物名歌の位置づけ 結論 | |

資料篇

| | |
|-----------|-----|
| 序詞一覧…………… | 176 |
|-----------|-----|

| | |
|--------------------------|--|
| 凡例 万葉集 古今和歌集 後撰和歌集 拾遺和歌集 | |
|--------------------------|--|

| | |
|---------|-----|
| 終章…………… | 228 |
|---------|-----|

| | |
|-------------|-----|
| 参考文献一覧…………… | 230 |
|-------------|-----|

| | |
|---------------|-----|
| 収録論文初出一覧…………… | 233 |
|---------------|-----|

【本文】

すでに出版契約がされており、契約内容により、インターネット公表に対する許諾が得られていないため、前文を公表することが出来ません。

書誌事項（萩野了子、題名『古代和歌の構造―様式が紡ぐ表現史―』、花鳥社、令和四年）

【参考文献一覧】

- 『万葉集』（新日本古典文学大系・岩波書店・平成十一年）
- 『万葉集』（新編日本古典文学全集・小学館・平成六年）
- 『万葉集』（日本古典文学大系・岩波書店・昭和三十四年）
- 『万葉集』（日本古典集成・新潮社・昭和五十一年）
- 『万葉集全解』（筑摩書房・平成二十一年）
- 『万葉集全訳注』（講談社文庫・昭和五十三年）
- 『万葉集注釈』（中央公論社・昭和五十九年）
- 『万葉集全註釋』（角川書店・昭和二十五年）
- 『万葉集私注』（筑摩書房・昭和四十四年）
- 『万葉集釈注』（集英社・平成七年）
- 『万葉集全注』（有斐閣・昭和五十八年）
- 『古今和歌集』（新編日本古典文学全集・小学館・平成六年）
- 『古今和歌集』（新日本古典文学大系・岩波書店・平成元年）
- 『古今和歌集』（日本古典集成・新潮社・昭和五十三年）
- 『古今和歌集』（日本古典文学大系・岩波書店・昭和三十三年）
- 『古今和歌集全評釈』（講談社・平成十年）
- 『古今和歌集評釈』（明治書院・昭和十六年）
- 『古今和歌集』（角川文庫・昭和四十八年）
- 『新版古今和歌集』（角川ソフィア文庫・平成二十一年）
- 『後撰和歌集』（新日本古典文学大系・岩波書店・平成二年）
- 『拾遺和歌集』（新日本古典文学大系・岩波書店・平成二年）
- 『貫之集・躬恒集・友則集・忠岑集』（和歌文学大系・明治書院・平成九年）
- 『私家集大成①中古Ⅰ』（明治書院・昭和四十八年）
- 『平安朝歌合大成 増補新訂 一』（同朋舎出版・平成七年）
- 『竹取物語／伊勢物語／大和物語／平中物語』（新編日本古典文学全集・小学館・平成六年）
- 『図書寮叢刊 古今和歌六帖』（養徳社・昭和四十二年）
- 『校証 古今歌六帖』（有精堂・昭和五十九年）
- 『古今六帖の万葉歌』（武蔵野書院・昭和三十九年）
- 『新編国歌大観』（角川書店・昭和五十八年）

- 『日本歌学大系 第一卷』（風間書房・昭和三十三年）
- 『古事記』（新編日本古典文学全集・小学館・平成九年）
- 『古事記 祝詞』（日本古典文学大系・岩波書店・昭和三十三年）
- 『口語訳 古事記』（文芸春秋・平成十四年）
- 『神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集』（新編日本古典文学全集・小学館・平成十二年）
- 『古代歌謡集』（日本古典文学大系・岩波書店・昭和三十二年）
- 『記紀歌謡全註解』（有精堂・昭和三十七年）
- 『日本書紀』（新編日本古典文学全集・小学館・平成六年）
- 『枕草子』（新編日本古典文学全集・小学館・平成九年）
- 『日本後紀』（国史大系新訂増補普及版・吉川弘文館・昭和四十九年）
- 『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店・平成十一年）
- 『時代別国語第辞典 上代編』（三省堂・昭和四十二年）
- 『古代語誌』（桜楓社・平成元年）
- 『古代語を読む』（桜楓社・昭和六十三年）
- 『万葉語誌』（多田一臣編・筑摩選書・平成二十六年）
- 『万葉集事典』（中西進・講談社文庫・昭和六十年）
- 『万葉集ハンドブック』（多田一臣編・三省堂・平成十一年）
- 『古今集の世界』（小沢正夫・塙選書・昭和五十一年）
- 『古代和歌史論』（鈴木日出男・東京大学出版会・平成二年）
- 『古代歌謡論』（土橋寛・三一書房・昭和四十六年）
- 『古代和歌の発生』（古橋信孝・東京大学出版会・昭和六十三年）
- 『音喩論』（近藤信義・おうふう・平成九年）
- 『古代和歌の成立』（森朝男・勉誠社・平成五年）
- 『景と心―平安前期和歌表現論』（佐藤和喜・勉誠出版・平成十三年）
- 『折口信夫全集 第七卷』（中央公論社・昭和三十年）
- 『古代和歌における修辞』（白井伊津子・塙書房・平成十七年）
- 『万葉集の作品と方法』（稲岡耕二・岩波書店・昭和六十年）
- 『万葉集の表現と方法 下』（伊藤博・塙書房・昭和五十一年）

『万葉集の様式と表現』（大浦誠士・笠間書院・平成二十年）

『折口信夫全集 第一巻』（中央公論社・昭和二十九年）

『国語学原論』（時枝誠記・岩波書店・昭和十六年）

『和歌文学の世界 論集 和歌とレトリック』（笠間書院・昭和六十一年）

『一冊の講座 古今和歌集』（有精堂・昭和六十一年）

『大伴家持―古代和歌表現の基層』（多田一臣・至文堂・平成六年）

『万葉集を学ぶ・3』（有斐閣・昭和五十二年）

『古今集とその前後―和歌文学論集2』（風間書房・平成八年）

『古代文学講座6』（勉誠社・平成六年）

『万葉集作者未詳歌の研究』（高野正美・笠間書院・昭和五十七年）

『万葉集の形成と形象』（高野正美・笠間書院・平成六年）

【論文の内容の要旨】

本論は、古代和歌における修辭、序詞を対象に考察し、当時の人々に修辭技法がどのように意識されていたのかを明かにするものである。序詞研究は、本論は平安期の和歌を対象に考察しその特徴を見ることによって、万葉集の表現との違いを浮き彫りにし、更に古代の人々が修辭をどのように捉えていたのか、どのような表現を目指していたのかといった、修辭意識の問題に迫ることを目的としている。

第一篇「序詞の変容」には二つの節を設けた。**第一章「古今和歌集の序詞」**では、従来あまり注目されてこなかった古今和歌集の序詞の特徴を、万葉集と比較しながら明らかにした。万葉集序詞は、序詞が描写する景の中の核となる部分（＝物象自体）と、序詞部分と本旨がことばを音のレベルで共有する部分（＝連結語）という狭い範囲における論理性によって、物と心が結び付けられていることが分かる。対し古今集の序詞は、一首全体に亘って論理的文脈を構成し、物と心を結束させる。この方法は、序詞を殆ど用いることのなかった六歌仙時代の詠作における、完全な二重文脈の歌を元に成し得たものであった。この二重文脈の歌は、縁語・掛詞を一首全体に鏤めており、景物と本旨の文脈がそれぞれ一首通して成り立っている。これを旧来の序詞の様式の中に持ち込むことで、古今集の序詞は万葉集のそれとは異なる特徴を持つことになった。これは古今集撰者が、論理を越えて強い結束を実現しているように見えた万葉集序歌の再現を目指したものである。

第二章「心物対応構造の変質と序詞」は、第一章で明らかにした古今和歌集時代の序詞の萌芽を万葉集に求め、万葉集序歌を時代ごとに考察したのであるが、万葉集の中にそのような様相を見て取ることは出来なかった。しかし、家持が越中国に赴任してから突然多くの序詞を用い始めること、また、都から離れた越中国という特別な地において、何ら新たな表現を生み出すことなく平凡な使い古しの詞を用いた序歌を詠んだことなど、不自然な点が見つかった。これは、みやびの世界の価値観からは、鄙の景の固有性を表現に掬い取ることが困難であったからで、家持の苦心が見て取れる。そのような状況の中で家持がごく平凡な表現の序詞を作り続けたことは、本来序詞に詠み込まれる景が当たり前のようには抱えてきた、物象の力に不信任を持ったためである。『万葉集』の序詞は、限られた例を除き、序詞内部に描かれる物象が抱える力に対して無批判に信用しているが、家持が鄙の景に立ち向かった時の序歌から、その力が不安定になっている。古今集序歌の、物象と心情との結びつきを論理的な文脈で説明して見せるという特徴から明らかな通り、古今集で

は物象が抱え込む力に懐疑的である。家持の越中国における作品は、そこへ繋がる兆しを見せている。

第二篇「序詞の表現に見る修辞意識」では、序詞と本旨の転換方法の中で、最も口誦的性格を留める、同音反復式序詞について考察する。万葉集、古今集に見られる同音反復式序詞の表現を分析し、それらの現れ様から、当時の人々が修辞に対しどの程度意識的であったのか考える。**第一章「同音反復式序詞の考察 前編―古今集当代歌の同音反復式序詞について―」**においては、同音で反復する序詞に注目して、それらが平安和歌にどのように受け継がれていくのか分析した。古今集においてその技法を用いたものを分析してみると、読み人知らず歌と撰者周辺歌人の歌の間には明確な使用法の違いが現れた。一般的景物を反復する場合、読み人知らず歌においては万葉集とほぼ同様のあり方が見られるが、撰者周辺歌は、序詞と本旨を様々な方法で強固に結び付け、歌の外側の情報が無くとも理解が可能な歌を採歌する。それに対し、地名を反復させるものは殆ど当代歌人の詠になる。地名反復に撰者達が当代性を見出したことが分かる。修辞技法による「古」「今」の棲み分けは、当時の人々が修辞に対し意識的な判断基準を有したことを表す。**第二章「同音反復式序詞の考察 後編―地名反復の序詞について―」**では、古今集当代歌において目立って見られた地名反復の序詞がどのような表現を目指す技法であるのか、同じく地名と序詞が密接な関係を持つ、地名に連鎖する序詞との比較を通して考察した。地名連鎖は歌の本旨に地名が含まれるので、地名をめぐる事柄が歌の主題となるが、地名反復は、本旨に地名が含まれず、歌の主題は心情が中心となる。ただし、地名反復の場合は、詠み込まれた地名自体も本旨の心情と対等なレベルで主題となっている点が特徴的である。地名反復は、本来その地に赴きその地での感慨を主想として詠う技法であった。古今集の地名反復の技法は、当代的表現方法によって序詞と本旨を強固に結び付け、地名を実体としての地名から〈人事的地名〉へと変質させる。それによって、作者がその地を訪れずとも、主想の側にせり出す地名の力が再生されている。万葉集の表現の継承と、新たな表現方法の適用によって、地名反復の序詞には多様な表現が展開した。

第三篇「修辞技法としての掛詞の誕生と展開」では、掛詞の考察を行う。万葉集から古今集への序詞の変化は、修辞としての掛詞が定着したことで深く関連していた。万葉集の段階では未だ掛詞が定着する段階にはないとされるが、それらがどのように定着し、発展していくのかを追うことで、古今集撰者の修辞意識に迫る。**第一章「万葉集の掛詞について」**では、万葉集における掛詞を分析し、それらがどのように展開するのか考察した。万

葉集における掛詞は、枕詞や序詞の一部分として現れる連鎖型のものが殆どで、単独で成り立つ含蓄型の掛詞の例はごく僅かである。また、宴会の際の戯れの歌において掛詞に近い技法を見出すことが出来るが、分析してみると、平安期に隆盛する掛詞とは系統を異にするものであった。稿者は万葉集の中で、一首全体を景の描写で一貫させながら、暗に人事的内容を含ませる「譬喩歌」に注目し、掛詞の定着していく土台がそこにあると考えた。

「譬喩歌」における、景描写で一貫した文脈は、縁語を発展させるきっかけともなっており、「譬喩歌」内部で構成される縁語群の展開と連動して掛詞が修辞として定着していく流れを持つと指摘した。一語が二つの意味を担う掛詞は、その異義語の組み合わせの唐突さを緩和させなければ、滑稽な駄洒落に近い修辞に傾く。「譬喩歌」によって構成された縁語群は、それらの衝突を緩やかにする機能を持つのであり、万葉集中ごく僅かに見られる掛詞も、縁語を伴っているものであった。**第二章「掛詞の表現構造」**において、第一章で述べた「譬喩歌」における縁語群が、いかに掛詞の修辞としての定着に関係しているか、掛詞式序詞とも絡めて考察した。万葉集の序詞形式の歌の中に、同音異義の掛詞を連結語に持つものが僅かに見られる。これらが後に掛詞の修辞として定着していくことは想像に難くないが、万葉集中には、このような掛詞式序詞は、地名に掛かるものを除外すると、ごく僅かにしか詠われていない。掛詞が修辞として定着していない時代には、掛詞式序詞もまた受け入れられにくい状況であった。それらが定着していく流れには、歌いたい内容を隠して表現する暗喩の歌、つまり「譬喩歌」の発達が関連してくる。「譬喩歌」の表現構造、用語は、同音異義語を用いた序詞形式の歌と類似している。それらの表現構造を分析した結果、掛詞式序詞から平安期の掛詞へと展開する流れのにおいて、「譬喩歌」が大きな影響を与えていることが明らかになった。**第三章「物名歌と誹諧歌」**では、古今集巻十の歌々に用いられている掛詞技法の一つ、物名歌の考察を行った。物名歌は、古今集の構成や表現からして、巻十九の誹諧歌と対を成すように存在している。実際それらは晴に対する憂、漢詩の影響を受けた当代的歌に対する、万葉集の宴歌に見る古代的歌、といった、対照的性質を見ることが出来る。しかし、物名という技法が用いられる歌を、古今集以外の私家集や散文から探し分析したところ、それらは古今集誹諧歌が持つ性質を有するものばかりで、物名歌と誹諧歌は源を同じくするものであることが分かる。古今集撰者が本来同根の歌々を、古今集への採録にあたり対照的性質を捉えて選り分けたと考えられる。

資料篇「序詞一覽」では、万葉集、古今和歌集、後撰和歌集、拾遺和歌集の序詞を挙げた。序詞の認定方法は、一首の中で文脈の転換が行われていることを条件とし、序詞自体

の音節数は問わない。枕詞との違いについてはまだ議論が必要であるが、本来の枕詞が文脈の切り替えを目指した修辞ではないことを踏まえ、切り替えの有無によって判断する。序詞部分と本旨の転換の方法によって分類を行った。本論における分類方法とは異なるが、「比喩式・掛詞式・同（類）音反復式・同（類）音反復及び比喩式・連結語無し」の五種である。また、一首の中に二度文脈の転換が行われていれば、「二重の序」として扱い、連結方法を両方とも記載してある。本論は万葉集から平安和歌の修辞史における序詞の位置づけや変化を追うことを目的としているため、短歌主流の平安期序詞との比較が難しい万葉集長歌の序詞は一覧から外してある。